

Salon d' AALA

サロン

ダーラ

2019. 1. 1.

No.110

海のホーチミンルートの話

成田 光生

11月に

立命館大学で「海のホーチミンルート」の著者グエン・ゴックさんの話を聞いた。

著者のサイン入りの本も買った。私は7年近く、療養のためベトナムで生活した。その間、対仏・対米戦争の兵士と一緒に行動することがあった。対米戦争の勇士は自動車部隊=陸のホーチミンルート。しかし、「海のホー・・・」の話は全く聞かなかった。彼は地元の名士で何度も家でごちそうになった。彼の母親は100歳を超えていた。

1945年9月2日、日本が米艦ミズーリで降伏文書に署名した日に、ホーチミンはベトナムの独立(対仏)を宣言。当然だがフランスは力で押さえつけようとした。

その時、ベトナムにいた日本軍元兵士数百人が、ベトナム人のために骨を埋める決意をして残留。戦争未経験のベトナム人兵士に近代戦の訓練をした。その成果もあって、1954年ラオス国境に近いディエンビエンフーのフランスの要塞を陥落させた。この勝利は世界の反植民地闘争を励ました。しかし、その際のパリ協定ではベトナム南北の分断を受け入れざるをえなかった。(この時のベトナム代表は女性)

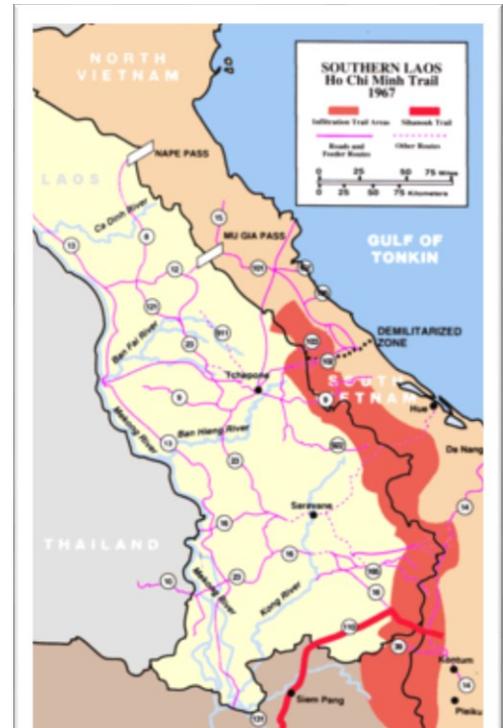
南ベトナム政府を後押ししたのは、当時の最強国家アメリカ。日本の報道の多くは「〇〇主義と〇〇主義の戦争」と書いたが、本質と内容は植民地解放戦争。「海のホー・・・」の人々は、どんな犠牲をはらってでも「自分たちの国をつくる」と決意。南の海辺の夫婦の数奇な生涯は過酷であったこの国を象徴している。二人が愛しあって子どもを産んだが、南が解放されるまで子どもの出生の秘密は親や兄弟・親戚にも話すことはできなかった。古い地縁血縁の世界の中で「不倫の子」として非難されても。しかも、その後四十年以上「海のホー・・・」の大部分は話されなかった。

テト(正月)攻勢が成功したのかなど・・・。

何十隻もの船が出発し、その内の数隻が目的地に着けば作戦成功という過酷な任務を実行した数多くの無名戦士の生き様は、平和な今こそ語り継がなければならないと思う。

植民地支配がどんなものであるか、江戸時代の武士と町民の立場が解りやすい。気に入らないと問答無用で斬り殺すのが法律。年貢の値上げや取り立ては過酷。それが20世紀の後半まで「正義として」続いたのである。

(続く)



ホーチミン・ルート (1967年)

旅はシベリア鉄道に乗って！！

加藤 明美

9月中旬夢だったシベリア鉄道に乗るため、「AALA」のメンバー6人を含む8人で城陽の地より、早朝、幹線で成田へ向かいました。と言いますのは、残念なことに関空が台風の影響で使用不可能になったのです。

成田から僅か2時間50分でハバロスクに到着しましたが、空港で入国手続きに一人20分もかかったのです。今どき、こんなに時間をとる国は少ないです。

空港の外では、韓国系の33歳の男性が迎えに来てくださっていました。恐らく2世でしょう。ロシアは労働力として、各国と交渉をもち、いろんな民族を自国に招きいれてきました。

空港を出ますと、すっかりヨーロッパ風です。丈夫そうな、格調高い建築群が目飛び込んできました。広い道はレーニン広場へと続きます。多くの住民は、白系ロシア人で、色白で、身長が高く目は紺碧です。ホテルに入ると、客人は、中国人、韓国人が多く、私達もそうですが、近場でヨーロッパの雰囲気味わえるからでしょうか？大変賑わっていました。各国の歴史は違いますが！翌日の午前中は、自由行動でしたので、ホテルの下に広がる大きな公園で、私達は、極東の朝日を浴びながら、大きな観覧車に乗ることにしました。

日本では、滅多に乗りません。

気温は、18℃。背の高いポプラの上の方が少し黄葉でした。極東での空気は澄んでいて気分が高揚し、満足度は100%でした。この公園の下には、大きな河が流れ、水面が美しく輝いていました。この河は、中国東北部（旧満州）からロシアとの国境を境にして、流れてきた「アムール川」です。

中国側の呼び方は、「黒龍江」です。

延々と流れてきて間宮海峡に注ぎます。

水面がキラキラと美しく輝いて、私達はここでゆったりと

半日を過ごしました。午後の見学は、教会や見晴らしのよい高台へとさそわれました。

ロシア正教会は、ほとんどが、ステンドグラスがありません。

またどの教会も新しいのです。それは、ソビエト時代、中国の文化革命（1966～1976）のように、文化や宗教に関心を持たず、嘗ての立派な教会は壊したり、倉庫としてきました。ですから、どの教会も新しいのです。景色のよい広場には、幾多の戦死者の名前が石板に刻まれていました。供火は、年中絶やさず燃え続ける工夫がしてありました。

ホテルでの夕食後、いよいよシベリア鉄道一泊の旅です。12時間後のウラジオストックも楽しみです。4人コンパートメントの部屋です。私は、二段ベッドの上でしたので、夜明けの風景は見えにくいでしたが、夜明けの美しい茜色が印象に残りました。僅か一晚の車中の人でしたが、道中さまざまな思いが浮かんできました。

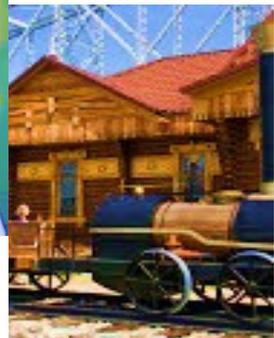
日本の兵隊が、捕虜として強制的に連れて来られ、多くの命が落とされました。この場所でなくとも他のシベリアへ。一本の枕木が一人の命といわれた程です。悲しいシベリアへの思いです。

8時にウラジオストックに到着。駅舎を出ますと、階段又階段。元モデルの美女のガイドさんは、手伝ってくれません。どこともなく現れた男性数人がサッ、サッと運んで下さいました。中には、運び屋、中には親切心です。人間は、どこの世界も同じだと思いました。

朝食には、欧州らしき美しい、レストランで、オムレツ風など美味しくいただきました。少々疲



シベリア鉄道の車掌さん



アムール川

れが癒されました。食後、彼女に「急だけど、今日か明日中に家庭訪問を入れて欲しい」旨を伝えました。突然のことで、彼女は少し困惑されましたが、「自宅に来て下さい」と申されました。彼女のお母さんと連絡を取られたようです。ニコライ凱旋門やマドレイの教会の見学後、彼女の家へと向かいました。



ウラジオストック

新しくはないですが、威風堂々としたビルです。エレベーターに乗るために、立派な玄関の石段を登りますと、美しく港の見える風景が目に入ってきました。しかし、年季の入ったエレベーターはガタガタで、8人が二回に分けて五階の彼女の家に着。65歳のお母さんは、クッキーを作って待っていて下さいました。大きな広い部屋が幾つも有り、天井は4メートルの高さです。お母さんは、フルーツやジャム、ジュース等珍しい果実で作ったのを提供して下さいました。「これらの材料は、別荘地で作った」と話されました。

フルシチョフ時代に家も別荘も国から与えられたのです。別荘地のことを「ダーチャ」といって、生活困窮時代に、ここで農作物や木の実などの栽培をして助かったようです。今これ等の家や土地は、高嶺の花で手に入れにくいよう話されました。これ等も中国と全く一緒です。伺う前に彼女にお礼しなければと皆で相談しましたら、彼女から、一人500ルーブル(日本円で千円)といわれ、ホッとすると同時に面食らいました。

帰国の前夜、かの有名な、マリンスキー劇場へ赴きました。待望のストラヴィンスキー作の『火の鳥』のバレエ鑑賞のために。洗練された舞台に、磨かれた技術、出演者が蓄えてこられた、各々の持ち味の美しさが、結晶として現れていたように思います。私にはえらそうな評価はできませんが、見終わった時の感動は、モスクワで、ボリショイバレエを見たのと同様な気持ちになりました。同行された一人の男性は、感激のあまり涙を溜めておられました。“ああ良かった”最後の締めくくり、大きな思い出ができて！！と喜びが溢れました。

感激の翌日の午前、考えることの多くて、思い出深いシベリアの土地を離れ、一路成田へと機上の人となりました。12月のシベリアは、-2℃と報じています。白一色の厳冬のシベリアを思い描いております。

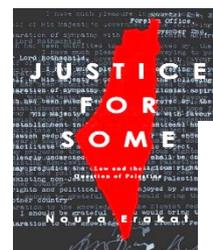


イスラエルに対する草の根のBDS(ボイコット・資本引き揚げ・制裁)運動が国際的に広がっていますが、12月14日、大阪でBDS Japanの発足集会が開催されました。

これまでに日本でも無印良品のイスラエル出店中止、イスラエル軍事見本市からのソフトバンク撤退など成果をあげて来ていますが。さらにパレスチナの平和のために日本で出来ることをみんなで考えましょうとパレスチナBDS民族評議会からヌーラ・エラカート氏を迎えての発足集会になりました。



ヌーラ・エラカート
(Noura Erakat) 氏：ジョージ・メイソン大学准教授
弁護士
学術誌 Journal for Palestine Studies 編集委員
AI Shabaka 顧問



著書に
Justice for Some: Law and the Question of Palestine
など多数

フランスとアイルランドの記事を読んで



井上 史

12月の初め、新聞で「フランス 親の体罰禁止」のタイトルを見つけました。

フランスの下院でEU諸国と足並みをそろえるかたちで、子供への体罰禁止の法案を可決しました。親は子供に「身体への暴力、言葉や心理的な暴力だけでなく体罰や、屈辱を与える行為」も行ってはいけません。EU加盟国28カ国のうち22カ国とEU以外34カ国が家庭での体罰禁止の法律を持っています。日本の法律では虐待は禁止ですが、体罰も言葉の暴力についても禁止はされていません。暴力による子供への関係性は、社会での暴力を許すことに繋がります。

この記事で興味深かったのは19世紀初めのナポレオンの時代に作られたもので、親が体罰を用いて子供をしつける権利を持つという法律だったのです。とても進んでいるかに見えたフランスでも、いまやっとなのですね。

2018年5月にはアイルランドの記事に「いまやっとか」と目を引きました。内容は、人工妊娠中絶を求め国民投票が行われ、6割以上の圧倒的多数の容認票を得たというもの。カトリック教徒8割という宗教がなじがらめで、女性の人権を勝ち取ることが大変であった歴史が想像できます。調べたところ1983年の憲法の条項では出生前の胎児と妊婦の命は同等の権利とみなし、中絶が出来ませんでした。2013年の改正で、妊婦の命が危ない場合に限って中絶を認めるとわずかに前進。レイプ被害者であっても中絶は認めないという内容でした。

アメリカ合衆国では1州除いて中絶が合法化されていますが、2013年ノースダコタ州ではジャック・ダルリンプル知事が中絶禁止法に署名をして成立しました。いかなる場合でも禁止というものです。こんな時代を過去に戻す州があるのですね。

日本では1948年以前、中絶は非合法でしたが（政府は富国強兵の政策から）、あちこちで当然行われてきました。その年「優生保護法」の成立で、中絶が合法化されました。1996年、その法律は母体保護法と名前を変えましたが、この優生保護法のもとで長らく障害者の人権無視の手術がされてきた歴史も忘れてはいけないことです。

お誘い： 詳しくは
来月にチラシを同封

3.1 朝鮮独立運動100周年

東アジアに非核・平和構築を！ 京都のつどい

2019年3月3日(日) 午後13時30分～16時30分

京都アスニー4階 ホール

- ① 朝鮮の歌と踊り
- ② 青年の主張（日本・韓国・朝鮮の青年）
- ③ 講演 「21世紀 新しい東アジア世界を！」

--3.1 独立運動100周年 その精神をどう生かすか

講師 井口和起さん

参加費 500円